



(ヨコハマ都市デザインフォーラム「横浜の都市デザインの方向性」分科会 左から二人目が教授 左端は筆者)

横浜市の都市デザイン室には、国内外から多くの人達が視察のために訪れていた。
その多くは国内の地方自治体の職員や議員だったが、海外からも様々な方が来られた。



リチャード・ベンダー教授

その中の一人に、カリフォルニア大学バークレイ校環境デザイン学部のアーバンデザインの専門家であるリチャード・ベンダー教授がおられた。

東京大学の先端研というところに来ているが、横浜市のアーバンデザイン（都市デザイン）について聞きたいと一人で訪ねて来られた。

図面、報告書などに囲まれたお世辞にもきれいとは言えない作業室で、テーブル代わりに企画調整局時代から使い続けている 3.6m 四方の傷だらけの製図版に、パンフレットなどの資料を拡げながら拙い英語で説明をした。

十分に理解をしていただけたかどうか不安だったが、ひととおり説明を終えると教授は「日本に来て、アーバンデザインとして聞くのはビッグプロジェクトの話ばかりだったが、初めてアーバンデザインの取り組みといえる話を聞くことが出来た。横浜の取り組みは素晴らしい」と感想を話された。



その後、横浜市では「都市のクオリティ」をテーマにした国際会議を企画し、1992年3月に「ヨコハマ都市デザインフォーラム」を開催した。

招聘を予定する講師陣の中にリチャード・ベンダー教授もあり、面識のある自分が連絡役になった。

時差の関係からは、市役所から電話出来るタイミングでないため、深夜に自宅からバークレイ校の研究室に電話を入れたところ、うまく教授がつかまり話をする事が出来た。

そして会議への参加を、即座に快諾して頂けた。

「フォーラム」の直前の1992年2月に、(社)日本建材産業協会と景観材料推進協議会共催の「第2回国際景観シンポジウム」で一緒する機会があった。

教授は基調講演をされ、おおよそ次のように話された。

「近代に入って街は自然を拒絶し、都市の拡大とともに周辺を侵食し環境破壊が進んだ。こうした厳しい状況の中でよい景観を創り出すための三つの原則がある。

一番目は、「象の引く轎」ではなく「何頭かの犬に引かれた轎」のように、時代に合わせて徐々に作りあげていき、沢山の人の意見を反映させるような細かい配慮や、時間の積み重ねによる街づくりを目指すべきだ。

二番目は、自然環境の個性を無視して人工的な環境をつくり上げると、多大な代償を払うことになる。サンフランシスコの大地震やカリフォルニアの大火災などは、経済効率を優先させたやり方に反省を促し、都市を考え直し、やり直す絶好の機会になる。

三番目は、極力自然のシステム、浄化作用や生態系などを利用する方向に変えるべきである。景観や生活環境は建築などの構造物で飾るべきものでなく、自然と友好的な関係をつくることにある。これまでの過ちを覆い隠すのではなく、今現在を良い方向に導くための転換点として積極的に活用してほしい」



シンポジウムの懇親会で

自分はその後のパネルディスカッションでパネラーを務め、横浜の事例をはじめ、いろいろな話をする中で教授の講演の中身にも触れ「教授の話はその通りだと思うし、横浜市が活動している都市デザインの考え方は教授の考え方と共通していると思う。しかし実際の街づくりの場面では、犬轎を引く犬は訓練されたハスキー犬ではなく、何の訓練もしていない犬や様々な動物の集合のようなもので、そこに都市デザインを現場で実践することの難しさがある」と発言した。

講師席にいた教授を見ると、ニヤッとされていた。

「ヨコハマ都市デザインフォーラム」には、教授は夫人と来日され、自分が滞在中のアテンドをした。

教授は、相撲好きの穏やかな方で、ご婦人は、何かと「happy!」を連発する明るい方だった。

前回横浜に来られた時に、説明だけで現場を見て頂く時間がなかったので、会議が始まる前にご夫妻を一日、関内地区を中心に市内を案内した。



日本火災横浜ビル シティコープセンター(サンフランシスコ)

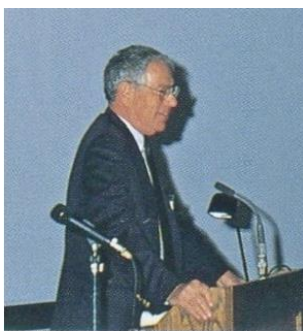
馬車道商店街にある「日本火災横浜ビル」を案内した時、「この建物は、今朝、家内と散歩した時に見つけて、大変面白いと思った」と言われた。

海外では見かける保存手法だが、横浜では初めて採用した事例で、横浜の歴史的建造物の保存制度を制定するためのモデルになった建物である。

「サンフランシスコにも、同じような手法の建物があるではないか」と云うと「こちらの方がきめ細かく、よく出来ている」



ヨコハマ都市デザインフォーラム風景



D分科会で講演する教授

「都市デザインフォーラム」では、テーマ別に四つの分科会に分かれていたが、「“デザイン都市”横浜の将来」のD分科会で「自治体政策としての都市デザイン」をテーマにスピーカーを務めて頂き、サンフランシスコ市の都市計画局長をしていたアラン・B・ジェイコブス氏などもパネラーに迎えていた。

リチャード・ベンダー教授には「公共政策としての都市デザインの手法」について講演していただいた。

教授は、まず初めにスライドの映像で、大きな象が長い鼻で大木を動かしている映像と、大勢の犬が犬糧を引っ張っている映像を並べて写し、「アーバンデザインは、一匹の象が大きな丸

太を動かすように、一つの大きな主体が物を動かすのではなく、大勢の犬が力を合わせて一つの糧を引くように、多くの主体が力を合わせて物事を動かすのに似ている」と話された。

そして「デザインレビュー」の意味合いと重要性などについて様々な事例を示され、「コミュニティの連続性と新しい建築物とのバランス」について述べられ、具体的な事例として「カリフォルニア大学バークレイ校におけるデザインの変遷」を紹介し、「都市デザインには時間の視座が必要である」ことを強調された。

「横浜の都市デザインの方向性」の分科会では、自分が講演した後のディスカッションで、パネラーのリチャード・ベンダー教授から意見を述べて頂いた。

「横浜のアーバンデザインの一番素晴らしいことは、広い一般的なコンセプトがあり、地域に対する大きな考え方からディテールに至るまで細かい配慮がなされていて、質も高いということだ。

アーバンデザイナーは、大きなプロジェクトにどのように生命を吹き込んで、小さなことまで生き生きとした精気、生命を与えるかということが重要だ」と述べられた。

「アーバンデザイン(都市デザイン)」は、日本では専門家といわれる人でも、その意味や内容が共通認識になっていると思えない。

自分がさまざまな機会に多くの専門家と話をする機会があったが、それぞれに専門とする分野や、立場などによって街や街づくりに対する認識や理解が違っていて、アーバンデザインの活動や役割などについて総合的に理解し、認識を共通にする人は非常に少ない。

そうしたなかでリチャード・ベンダー教授は「横浜市のアーバンデザインについては10年ほど前から研究していた」と話されていたが、以前、市役所に来られた時の様子からも、横浜市が現実の街を相手に活動している都市デザインの取り組みを理解し、その考え方を共通にする数少ない人の一人である。

現在は名誉教授になっておられるだろうが、機会があればまたお目にかかって話をしてみたい方である。

(2019年11月 記)